

平成19年度庭野平和財団活動助成最終報告書

[コード番号] 07-A-058

[申請事業の名称] 土のうハウスづくりを中心とした遊戯空間の創造

[被助成者氏名] 創造的遊戯空間研究会代表 町田宗鳳 ㊞

[所属] 広島大学大学院 総合科学研究科

1. 研究/活動の目的

現代社会では、人と人との〈つながり〉が極端に薄れている。昔ながらの活発な地域は失われ、隣の住人と挨拶も交わさないコミュニティも増加している。他人に無関心であることが、活気のある社会を作る上で大きな弊害になっている。一方で、所謂現代社会の枠に当てはまらない社会不適應者も増加している。ホームレスや引きこもり、うつ病やニートなどは、自らの力で社会復帰することができないでいる。そして、これら社会不適應者に対して、社会適應者からの蔑視が存在することも事実である。また、先進国における自殺が後を絶たないことも深刻な問題であり、これらの問題に対する行政の対策も不十分である。

これら二つの問題を踏まえると、先進国は物質的に豊かであっても、精神的難民であるとも言えるかもしれない。そしてこの二つの問題は、同じ原因をもっていると考えられる。それは、M. フーコーの『狂気の歴史』にあるように、近代文明が狂気を不当に差別し抑圧しているということである。自らの内に狂気を抑圧し監禁するということは、現実の世界においても、狂人（現代の常識に当てはまらない人々）を抑圧し疎外することに他ならない。

問題の本質は、両者を隔てている壁であり、必要なことは、その壁を取り除くための具体的な処置である。また、それは人々が心の内で監禁している狂気を解放するということと同義である。その解放の手段として、非日常である「祝祭」の開催を試みる。「祝祭」により、狂気（＝神の領域）に一定のポジションを与え、常識や蔑視を取り払い潤滑なコミュニケーションを促し、地域の活力を取り戻すことが目的である。また、「祝祭」の土台となる土のうハウス作りは、平凡な土地に非凡な意味を与え非日常的空間を作り上げる効果がある。

さらに、土のうハウスづくりや祝祭の準備段階で地域の人々が交流すると考えられるため、地域交流という面で成果が期待できる。また、「祝祭」では、人と人との交流という目的を軸に、あらゆる人が考える活発な活動全てを包括するため、様々な社会的波及効果が期待できる。具体的には、地域の活性化を始め、社会不適應者が活力を取り戻すこと、人々の社会不適應者に対する蔑視が軽減されることが挙げられる。社会不適應者

を社会復帰させるということではなく、社会的な人々による蔑視をなくすことによって、これらの人々が生きがいを取り戻し、これまでとは違う意味での社会的人間となることが考えられ、その意味では新型社会福祉であり、社会的意識改革をも目指した活動である。

2. 研究/活動の内容と方法

この計画は、2年もしくは3年計画である。1年目には、非日常的空間がどのように形成され、どのように人々に活力を与えるのかを研究する。また、文献調査と並行し、実際に土のうハウスの試作建設を行う。すでに土のうハウス作りは実際にアジア諸国の難民救済に役立っている。そのようなプロジェクトを行っている技術者から直接学ぶことで、土のうハウス作りのノウハウや効果を習得する。

およそ1年間の「祝祭」実践のための調査や資料収集を行うと同時に、実現のための手続きや準備を行う。「祝祭」では太鼓や踊り、アマチュアミュージシャンによる芸能、フリーマーケットのような日常とは別の市場、土のうハウスでの展示やイベント、沖縄の伝統的遊びである毛遊びなど、人々が交流し集い活動するもの全てを取り入れるため、事前準備にも十分な時間をかける。

3. 研究/活動の実施経過

共同研究員による文献調査と並行し、広島県安佐北区白木町にて、土のうハウスの試作建設を行った。共同研究員が土のうハウス作りのノウハウを会得するだけでなく、「志和・竹の子学園」と共同し、地域活性化をも視座にいれ活動した。

当日は、「志和・竹の子学園」の関係者、地元住民のほか、広島大学の学生、一般市民など、のべ数十名が参加した。

1. 実施名 : 土のうハウス・プロジェクト
ー土のうハウス作りを中心とした地域活性化計画ー
2. 活動期間 : 平成19年10月26日～平成19年10月28日、
平成19年11月3日～平成19年11月4日
3. 実施場所 : 広島市安佐北区白木町志路中ノ村佐伯群成人
4. 実施目的 : 日本は最も豊かで平和な国の一つであるが、その一方で家庭や教育の荒廃、精神疾患や自殺の増加など、人間の心に由来する問題が山積みしている。知識人が、それらの問題を批判論評することはあっても、その状況を改善するための具体的行動をとることは稀である。
その反省を踏まえて、土のうハウス・プロジェクトは、全員参加型の労働を基盤にし、人間的な<学び>の場を提供しようとするものである。そこでは、異なった立場にある人間が集い、身体的共同作業を通じて、精神医学でいう「基本的信頼」を取り戻し、それを契機に自己

実現をしていくことを目指す。

土のうハウス建設では、土に触れることによるヒーリング効果や、共に汗をかく肉体労働によって、心に問題を抱える者も抱えない者も、サイバー時代に喪失しつつある生命力を回復することになるだろう。

また建設サイトは、過疎化による限界集落ともいえる場所であり、ここで多くの若者が集い、地元高齢者と共に労働することに大きな意義を見出している。

本プロジェクトの目的は以下の7点に集約される。

- a. 家族関係の修復
- b. 地域社会の活性化
- c. 新たな共同体の創生
- d. 感受性豊かな青少年育成
- e. 社会的不適応者の自立支援
- f. 団塊世代の社会貢献
- j. エコロジカル・マインドの促進

4. 研究/活動の成果

土のうハウス試作建設として行った「土のうハウス・プロジェクト—土のうハウス作りを中心とした地域活性化計画—」では大きく3つの成果が挙げられた。

第一に、土のうハウス建設にかかる日数、人員数、材料、道具、技術作業行程が明らかになった。

第二に、土のうハウス建設に携わった者たちの精神的充足および、そこでの人間関係に大きく寄与した。この点で、「土のうハウス・プロジェクト—土のうハウス作りを中心とした地域活性化計画—」活動の実施目的は果たせたといえるだろう。

第三に、土のう建設に関わった団体における波及効果がみられた。土のうハウスが建設された竹の子学園では、その後土のうハウスを軸に新たな行事が催され、地域の活性化が図られている。

第四に、技術支援者である渡辺菊眞氏（一級建築士）は、現在ウガンダのビクトリア湖畔において、土のうハウスによる大規模なエコ・ビレッジ建設に着手している。代表である町田宗鳳も現地に赴き、地元の名門マケレレ大学の教授会で、このプロジェクトの意義を説明したところ、諸学部長から大きく注目され、将来、エコ・カレッジとして発展する可能性も見えてきた。

5. 今後の課題

今回実施した「土のうハウス・プロジェクト—土のうハウス作りを中心とした地域活性化計画—」を通して、土のうハウスを中心とした遊戯空間の創造には二つの過程が存在することが明らかになった。

一つ目は、完成された土のうハウスを中心とする非日常である「祝祭」の開催である。目的でも前述したとおり、「祝祭」により、狂気（＝神の領域）に一定のポジションを与え、常識や蔑視を取り払い潤滑なコミュニケーションを促し、地域の活力を取り戻すことが期待できる。

二つ目は、土のうハウス建設の過程である。今回実施した土のうハウス建設では、皆で一つの巨大な建造物を手で作り上げていくという共通の目的に向かって、地域住民、学生、一般市民など、普段は触れ合う機会の少ない人々がともに汗を流し、時を共有したが、そこでは自然に対話や協力関係が生まれ、相互理解が深まっていた。それは、完成した土のうハウスを中心とした「祝祭」開催以上に、常識や蔑視を取り払った潤滑なコミュニケーションの促進につながることでもあるだろう。

今後、継続的に土のうハウス建設を実施するための場所の確保や参加者への呼びかけなどが課題となると考えられる。

6. その他

2007年（平成19年）10月29日（月）「中国新聞」に記事掲載 [別紙1]